

没後20年 「麻田 浩 展」 —^{せいひつ}静謐なる楽園の廃墟—

練馬区立美術館（中村橋）

2017.09.28～11.19

「麻田浩」(1931～97)は、父日本画家「麻田辨自」、兄「麻田鷹司」の美術家一家で育ち、大学在学中に「新制作協会展」に出品し初入選を果たしている。

画伯は、初期の洋画家として歩み始めた1950～60年代には、「アンフォルメル」(1940～50年代にフランスを中心に現れた、激しい抽象絵画を中心とした美術の動向)に傾倒したが、欧州旅行にて「古典絵画」を再確認したことで独自の“**幻想的な風景画**”を生み出し、「版画」の制作にも力を入れて活躍した巨匠である。

彼は50歳時に帰国した後は、水滴や羽などの自然物を配した独特の「原風景」とともに、「原都市」と名づけられた“**美しき廃墟空間**”を描き続けていた。

本展は、練馬区独立70周年と画伯の没後20年の記念の年にあたり、初期から晩年までの「約140点」の油彩画、版画などを通して画業である“**全身全霊をかけて真摯に追及した絵画世界が何であったかを探ろう**”とする企画である。



- 《蕩児の帰宅（トリプティックのための）》 1988年 油彩・キャンバス 左
《庵（ラ・タンタンション）》 1991年 油彩・キャンバス 右
他に《ル・トロワールNo2》 1973～74年、《御滝図（兄に）》 1990年、
《落水風景》 1973年、《原都市》 1983年油彩・キャンバスなどの作品が展示されている。